

## 【解答例 1】

農家の老夫婦が、稲刈りのお礼におにぎりを持ってきてくれたのは、純粹な善意からの行為だろうから、他人の握ったおにぎりは食べられないというような理由で、多く残してしまうのは大変失礼にあたるだろう。老夫婦も、食べ残されたおにぎりを見て、残念に思われるだろうし、不快な気持ちにさせてしまうかもしれない。正直言えば、食べなかった生徒たちは神経質すぎるとも思うので、なるべく食べるよう指示し、善意を受け入れるべきだと指導したいところである。しかしながら、これまで非常に清潔な環境で育ってきて、他者との関係も希薄になっている若い世代の生徒たちには、他人の手に触れた食べ物を口にすることは少なかったのではないだろうか。おそらく、工場で清潔に管理されて作られたコンビニおにぎりか、家族が握ったおにぎりくらいしか口にすることがないのだろう。そんな生徒たちに、他人の握ったおにぎりを食べることを強要することはできないのである。

したがって、農家の老夫婦には大変申し訳ないのだが、生徒たちの世代は、衛生面の感覚が敏感になってきていることや、家族以外の人との関係が希薄になってきていること、そして、だからこそ生徒たちに悪意があるわけではないことなどを丁寧に説明し、他人の握ったおにぎりを食べられず、多く食べ残してしまったことを、理解、納得してもらおうしかない。また、食べ残したおにぎりを、自分が持ち帰り、あとで教員でいただくのはどうかという提案も考えられるのではないか。

生徒たちには、老夫婦の稲刈りをしてもらったことへの感謝の気持ちや、おにぎりを食べ残すことが彼らに大変失礼にあたるのだということをきちんと伝えなければならぬ。もちろん、おにぎりを食べ残したことについて、十分反省してもらい、老夫婦に直接謝罪させるべきだろう。そうすることで、他者への思いやりや、人間関係のあり方という、稲刈り体験以上の学びになるのではないだろうか。

ちなみに、今回のような、学校を離れた体験授業では、こうした問題が生じることが予想されるはずである。ならば、教師として、事前に生じる可能性のある問題を想定しておき、対策を講じておくべきだったのだ。今回の問題ならば、農家の老夫婦に対して、食事などの提供はお断りしておくのが望ましかったのだ。

## 【解答例 2】

多くの生徒が知らない人の握ったおにぎりを残したことについて、大変に残念ではあるが、仕方がないことだと私は考える。生徒たちに無理に食べさせるわけにもいかない。そもそも生徒たちが残したのには、それなりの理由があると考えるべきだ。現代のように人々の生き方も価値観も多様であって、直接的な対人関係が限定的な時代には、「知らない人」に対して不信感が先立ってしまう。同時に、清潔至上主義的な価値観も広まっている。そのような状況で、自分の口に入れるものには、それが安全な食べ物であると分かっていたとしても、強い抵抗感を持つのだろう。心理的に違和感の強いものを、体内に入れて同化しようとすることは困難である。要は納得の問題である。高校の授業の一環として訪れただけで、たいして時間を共有したわけでもない農家の高齢者との間には、目に見えない壁があるということだ。

そうであれば、時間をかけて農家の方と生徒たちとがコミュニケーションを重ね、そんな壁を超えていくことが大切である。高校の授業がどのようなスケジュールで行われるのかは分からないが、授業の目的が単なる「稲刈り作業」の手伝いという単純労働の習得を超えて、生徒たちの日常生活とは異なる生活様式や自然の豊かさを知り、自分の視野を開いて、人生の別なる可能性を探ることにあるとすれば、農家の方との会話を深めることを目指して授業を始める必要がある。それは内申書のためのアリの作業であってはならないはずだ。教師は農家の方に義理立てして生徒たちに「おにぎりを食べ」と説教するのではなく、農業という労働や生活、そのあり様を、時間をかけて丁寧に伝えていけばよい。

その時、生徒たちが知るべきなのは、自然を相手に労働をして農作物を作っていくことの過酷さや尊さや面白さ、そして、良質な土や水がどれほど大事かといったことになると思う。農作業において土にまみれて働くということは、現代人のちっぽけな清潔至上主義など遥かに凌駕する問題である。こうしたことは、しかし、教師が直接に語らなくてもよい。教師は媒介者にすぎないのであり、農家の方と生徒たちが自由に気さくに語り合えるような場を用意することが重要である。そんな機会があって、互いによく理解し合えたら、生徒たちも農家の方のことをもはや「知らない人」とは言わないだろう。おにぎりだって、今度は一緒に作ればよいのである。

## 【解答例 3】

生徒たちの反応はある意味で正しい。高齢の、おそらく調理師の免許をもたない農家のご夫婦が握ってきたおにぎりには、衛生上重大な問題があり、集団感染を引き起こすリスクを否定できない。指導者としては、生徒たちにそのようなおにぎりを食べさせるべきでなく、リスク管理が十分でなかったといえる。

ただし、本来は自分たちが生産の一端を担った米について、それを食べる段階までが農業体験に含まれるべきではなかったか。稲刈りによって得られた米をその場で食べることを通じて、食料を自分の手で生産しそれを消費するという人間にとって原点となるものを実感することが、農業体験の重要な目標と考えられる。指導者としての私はそこまできちんと認識し、農業体験の中に生徒たちが自分の手で刈った稲を米にして炊き、自分の手でおにぎりを握って食べるところまで含めるべきであった。

現在の高校生たちの中には、母親の握ったおにぎりさえ食べられないのに、コンビニで売られているおにぎりならば食べられる、という人がたくさんいるらしい。コンビニのおにぎりは機械で握られていて「衛生的」だから、という理由なのだろうが、これは現代人がコンビニのような大きなシステムを信仰し、人間同士のつながり、きずなには信頼を寄せない、ということの現れである。こうした大きなシステムに過度に依存する結果、たとえば震災によってすべてのコンビニが機能しなくなるといったようなシステムの破綻に対して脆弱となるとともに、コンビニというシステムが生み出す膨大な食品ロスのような浪費に対する感性やモラルが低下する。

生徒たちには、上記のようなことを説明するとともに、ある人間から自分に対して寄せられた感謝の念に対し、自分もまた人間として感謝の念を込めて応えるにはどうしたらよかったのかを考えさせることになるだろう。農家のご夫婦に対しては、ありのままに伝えて、せっかくのおにぎりをたくさん残してしまったことを謝罪するとともに、今後のありうべき農業体験について考えを説明し、ご協力を願う以外にない。現代の米作農家はコンビニを経営する企業に米を一括買い上げしてもらったり、機械でにぎったおにぎりにしても美味しい米を生産したりしているので、事情を直ちに理解し、以後米の生産者と消費者との間の新しい関係を築く努力に参加してくれることだろう。